

岐阜県土岐市の陶作家、伊藤慶二さん(86)の個展が、現代美術をリードする東京・六本木の「小山登美夫ギャラリー」で初めて開かれている。従来の陶芸のジャンルにとらわれない幅広い創作活動が目された形で、現代美術の視点からその作品世界に迫っている。
(宮崎正嗣)

岐阜の陶作家・伊藤慶二さん 東京・六本木で個展

アートとして見せる陶芸

「工芸の特徴である『用』のあるものは見せていない。陶芸家としてではなく、あくまでもアーティストとして向き合ってきた」。ギャラリーの代表、小山登美夫さん(左)は企画の狙いを説明する。陶作家の展覧会では器などの小品を多数並べることが

あるが、今回は伊藤さんの新作や近作三十点を厳選した。人物の頭部を大胆にデフォルメした「面」シリーズの連作は、黒く輝く素材の質感がブロンズなどの金属を思わせる。焼き締めた土の肌に顔料を塗って拭き取るなど、絵画的なアプローチにも着目。長



①個展を開いている伊藤慶二さん。人体をモチーフにした立体作品「うずくまる」(手前)や油彩画を展示している
②2008年から取り組んでいる「面」シリーズの一つ「おとこ」=いずれも東京・六本木の小山登美夫ギャラリーで



年手がけてきた油彩の近作も展示し、壁には「面」シリーズを写し取ったような重厚な絵が並ぶ。実用性から離れた作品群は、彫刻家や現代美術作家の展覧会と言われても違和感がない。

伊藤さんは土岐市出身。武蔵野美術学校(現武蔵野美術大)油画科を卒業後、県陶磁器試験場で陶磁器デザイナー・日根野作三に学んだ。縄文の原始芸術をはじめ古今東西の造形美に着想を得つつ、

大波小波

「ユリイカ」二月号が昨年十月に八十一歳で亡くなった柳家小三治の特集を組んでいる。多彩な執筆陣によって幅広く小三治の個性と業績が論じられており、落語ファンには必携の一冊である。
小三治は二〇一四年に人間国宝となった。志ん朝なきあと最高の実力

者だから文句のつけようがない。ライバルたりえた存在は立川談志のみだが、談志が人間国宝というのはどうも似合わない。

力のこもった小三治追悼

とはいえ、人間国宝となつてから、小三治をとり巻く雰囲気が変わったことも事実だ。要するに、ある種の神格化が進んだ。これは

「ユリイカ」の誌面にもはつきりと反映している。みんな小三治を神棚に祭りあげている感じなのだ。あらゆる権威を恐れずに笑つ

落語の本質にとつて、これはちょっと困った事態である。小三治論として一番説得力のあった書物は広瀬和生

の「なぜ「小三治」の落語は面白いのか？」だと思つが、ここで広瀬は、小三治の落語では小三治という演者が消え、ただ「登壇人物たちが生き生きと動き回ると記した。卓見である。だが、晩年の小三治は自分の生き方を語り、落語家としての自分を疑っていない感じがした。そこがすこしだけ引かかった。」

(幸兵衛)

2022.1.21

現代美術ギャラリーで異例 ジャンル越境の先駆者

「面」シリーズや反戦のメッセージを込めた「HIROSHIMA」シリーズなど、強い精神性を帯びた造形作品を生み出してきた。しかし、その先駆的な創作活動は、時として「陶芸」の中では位置付けが難しく、伊藤さんは「理解されない方が多かった」と振り返る。

しかし昨年夏、岐阜県美術館と愛知県内のギャラリーで開かれていた伊藤さんの個展を見た小山さんが、その作風を目を付けた。「作品の形に色づかいがうまくマッチしていた。自分の中ではあくまで彫刻、立体の作品として迫ってきた」と小山さん。後日、実際に土岐の窯に足を運び、東京での個展を提案。日本を代表する現代美術のギャラリーと美濃の陶芸の重鎮という異例の組み合わせが実現した。

近年、イケムラレイコさんや奈良美智さんなど、絵画に軸をおきながら、陶芸を使った表現を試みる現代美術作家が少なくない。本展の視点からは、伊藤さんが創作ジャンルの越境を試みた先駆者という見方もできる。

伊藤さんは「自分の中で陶とキャンバスに境界はなかった」とこれまでの歩みを思い返し、「現代アートの空間で取り上げてもらったことが、素材や色など、今後の創作に作用してくるだろうと思う。これからまた勉強です」と意気込みを新たにしている。二月十二日まで。